

平成14年1月29日

林敏彦教授退官記念講義録

「公共政策未来学」

本日は最終講義ということで、どういうタイトルにするか悩みました。多くの最終講義は、たいがい定年でお辞めになる時になさるものですから、自分の学問遍歴を振り返ってお話をされることが多いので、それはそれで非常にためになりますし、実は私自身が学者の道を志したのも、その昔ある老教授が定年の時に退官記念講義でお話になった一言がきっかけであったということがあります。まずその話を先にさせていただきます。

風采が上がらない、ぼそぼそとした声でしゃべる経済政策学を講じていたある先生がおられました。何を言っているのか分からないし、風呂敷包みに本を包んでやって来て、顔もあげないでぼそぼそとしゃべっては帰っていくという講義の毎日だったものですから、生意気盛りのわれわれ学生は先生をバカにしていました。「あれでも国立大学の教官か」「俺でもあの年になればもうちょっとましなことが言える」と互いに生意気な話をしていたわけです。ところが、この先生が退官される時に、最後の日だけは敬意を表して聞きに行きに行かんとって仲間と揃って最終講義を聞きに行ったわけです。すると相変わらずぼそぼそと先生がおっしゃったのですが、その中で「君たちは経済学をやっている。すると成長率や失業率といったいろんな数字に出くわすだろう。しかし経済の数字は人間やで。」とおっしゃった。「失業率5%言うたら、その裏に今日首をくくって死ななならん家族がおると言うことやで。」とおっしゃったわけです。私はそれで全身に水を浴びせられたようにショックを受けました。こんなにえらい先生のことを、なぜ今までバカにしていたのか、と思ったのが退官の日なのです。そういう意味では、われわれは数字を相手にしたり、理論を相手にしたり、モデルを語ったりしますが、私の原点があるとすれば一つはそこにあると思います。そういう感銘を受けたこともありますので、学問遍歴を振り返る講義も大変良いのですが、ただ私はまだ過去を振り返って自分の業績をきちんと整理できるほどのこともないと思ったものですから、「未来学」という将来を見通す話をしようということで今日のタイトルをつけさせていただきました。

今日は「公共政策未来学」というタイトルの下で、三つの話をしようと思いました。一つは、公共政策学です。学問分野としての公共政策学はどのようになっていくのだろうか

という未来の話。もう一つは、公共政策そのもの、あるいは作成過程、立案過程。政策の立案、執行過程の未来はどうなっていくのかという話。そして三つ目は、わが国際公共政策研究科という組織の未来学という三つの話をしてみたいと思いました。

1. 公共政策学

公共政策学ということの特徴は、非常に幅の広い知識、経験が必要とされるということが最大の特徴だと思います。ざっとあげても既存の学問分野としては「公共経済学(Public Economics)」という分野にも関係します。それから「公共選択(Public Choice)」という分野の研究があります。そして「政策科学(Policy Science)」という分野、そして「政策分析(Policy Analysis)」という分野もあります。それから「法と経済(Law and Economics)」という分野があります。それから伝統的な「政治経済学」や、「財政学」、「行政学」があります。このように、ざっとあげてもこのくらい多岐にまたがる話をするわけです。すべての分野を極めてから政策学をやるかといえば、そうではないかもしれない。けれども、政策をやる人は、ひとつは学問的に深い洞察を持っていなければいけない。同時に目の前の政策課題に対する非常に深い洞察や共感を持たなければいけないという雰囲気があります。下手をすると広く浅くになるわけですが、できるだけ学問分野として極めていくためにはこれを深く掘り下げる必要があるというのが第一の特徴かと思います。

この意味で言いますと、これは法学部の先生に教えて頂いたことがあるのですが、1930年代のハーバードの法律のプロフェッサーをしていて、やがてルーズベルトに見込まれて最高裁の判事になった Felix Frankfurter という人がいました。この人はニューディールの担い手の一人でもありますが、この Felix Frankfurter にあるとき中学生が手紙を書いたといわれています。「私はあなたのような立派な法律家になりたいが、どういう勉強をしたらいいですか？」これに対して Frankfurter が返事を書いた。「いろんなところに行きなさい。いろんな人に会いなさい。いろんな本を読みなさい。いろんな体験をしなさい。そして法律の勉強は最後の最後で結構です。」という返事を彼が書いたのです。私はこれが公共政策を勉強する一つのポイントだと思います。「いろんなことを経験して、いろんな人にあつて、いろんなものを考えて、そしてテクニカルなことは最後の最後で結構です。」こういう姿勢が必要ではないかと思います。

一般に、ある問題に関してアプローチをする時に二通りのアプローチの仕方があろうかと思います。ひとつは基礎を積んでから応用というように、伝統的な学問分野の基礎を修

めて、その上に自分なりの新しいものを付け加える、あるいはそこでの方法論を応用的に活用する。こういう勉強の仕方が一方であるかと思います。もう一方は、「issue oriented」と言うように問題意識からはじまる。「あることを解決したい。その解決のためにはどういう方法が必要か」といってその道具を揃えていくというやり方があるかと思っています。公共政策という学問分野はこの両方が必要なのですが、どちらかと言えば既存の学問分野、例えば経済学、あるいは法学や工学分野にもそういうところがあるかもしれませんが、これが基礎の上に応用を積むという学問体系ないしはカリキュラムの体系になっているとすると公共政策をやる時にはまず問題があって、これに対してどう突っ込んでいくかと言う姿勢も必要かと思っています。国際公共政策研究科は一体何をやるどころだということが設立当時問題になりましたが、今でも脈々と流れている一つの特色は学生諸君が極めて問題意識を鮮明に持っているということです。例えば、既存の大学院ですと、学部から仕方ないから大学院に上がって、2年でも5年でも猶予期間をというモラトリアム人間もいるかもしれませんが、国際公共政策研究科は学部を持ちませんから、ここの大学院に来ると思うためには何らかの決断をしてくるわけです。漫然と行く場所ではなく何らかの決意を持ってくるわけです。その決意の時に何らかの問題意識を持っているという気がします。それが他の研究科と多少違う特色かと思っています。事実、これまで国際公共政策研究科を卒業して博士を取っていった人にはいろいろな人がいました。私の印象に残っている人を一人紹介しますと、これはある女性でしたが、教育学部を卒業して会社に就職されました。そこでの人事部や労務管理のあり方に関してどうしても納得できない、おかしい、絶対に間違っているという問題意識が強烈でした。彼女はその強烈な問題意識だけで OSIPP に入ってくられました。もちろん、経済のバックグラウンドも法律のバックグラウンドも皆無です。ただ絶対におかしいという信念だけで入ってくられました。しかしこの信念で彼女は5年間で博士課程を卒業して、今立派な労働経済学者になっています。これは労働経済学をやって、ミクロをやって、マクロをやって、いろいろ積んでいって応用したというのとは一味も二味も違う迫力のある学者になっていると私は思います。学者を生産することだけが OSIPP の目的ではないのですが、そのような問題意識の強烈な人がいるということもこの研究科の特色かと思っています。

結局のところ、政策とは人間社会に対する働きかけですから、人間社会に対する、あるいは人間そのものに対する非常に深い愛情と洞察力、これが最後には必要になります。学問と言っても分析の道具です。道具を使って何をするか、何をしたいかが問題になります。

そのときには学問を超卓するという分野の仕事もあります。同時に名医になるという分野の仕事があります。政策学はこの「名医」の分野が必要であるような気がします。法律もそうかもしれません。法律の条文に書いてあること、あるいは解釈の蓄積がいくらあっても、恐らく裁判という実践においては、その法を実行する、解釈する、適応するということに、その人間の全人格を賭した人生観、社会観、人間愛と言ったものが現れてくる。ここを訓練するというのも「政策」ということを考える時には必要であって、政策学は決して出来あいのものをボタンを押せばカチャカチャと組みあわせが決まって答えが出てくるというものではありません。それは人間が人間を説得すると言うことが必要です。

私は経済学部に行った頃、卒業して会社に就職したある先輩から言われました。「経済学部の卒業生は合理的な思考をしていて、非常によく勉強している。しかし一つだけ彼らに分かっていないことがある」と言われたことがあります。これは前任の神戸商科大学にいたときに、そこにいた学生を採用してくれた企業の人事部長に言われました。「お宅の学生は非常によく勉強している。従って、入社してしばらくの間は光っている。ところが管理職になる頃から次第に姿が見えなくなってくる。なぜそうなのかということを書いてよく観察していたら分かった」というのです。「もしも世の中一般の人々がすべて合理的に行動する人ばかりだったら、お宅の学生が出す答えは正解だ。しかし、お宅の学生が分かっていないことは、“人間本来愚かである”ということがわかっていない」と言われました。なるほどと思いました。その「愚かである」ということも含めて、人間に対する愛情や共感などが求められるのだと思った次第です。したがって、公共政策学の将来としては、特に新しいことはないわけですが、学問と実践、学問の総合性などがますます要求されるようになるのではないかと思います。

2. 公共政策策定過程

二つ目に公共政策の策定過程についてはどうかといいますと、国の公共政策は霞ヶ関が独占しています。地方自治体の公共政策もやはり地方の行政機関が独占しています。それは政策のニーズの察知の仕方、立案の仕方、立法、実行、解釈まですべて独占しています。私はこれは好ましくないと思います。根が経済学者でありますので、ついそういう発想をするわけですが、官であれ民であれ、独占が偉大なことをなしうることはないと思います。したがって、立案、立法、執行においても独占はよろしくない。政治の分野では二大政党がチェックアンドバランスを行う。デモクラシーの基本はチェックアンドバランスと言わ

れていますが、特にわが国の場合は霞ヶ関の独占が強い。最近では学会からも、霞ヶ関に入
って行ってそこで仕事をするという人も増えて来ました。竹中平蔵大臣は、私が経済学部
にいたときに同僚として1年半を過ごした方ですし、竹中平蔵氏に博士号を認定した委員
の一人は私でありますので、竹中平蔵大臣は私には足を向けて寝られないはずなのですが。
そういうわけで、彼も大阪大学を踏み台にして、リスクを取って政策を実行するという立
場になって頂いたわけです。それから本間先生もそうですし、新聞によりますと跡田先生
もそれに近いことをするように伺っています。こういうことは結構なことだと思います。
却って今まで日本でこういうことがなさ過ぎたというように思います。これもタレント、
才能、情報処理能力を霞ヶ関が独占してしまうのはいかがなものか。やはり競争的なもう
ひとつの核、コアが必要です。あるとき私はそれを「西の霞ヶ関構想」ということで日経
新聞の経済教室に書かせてもらいました。霞ヶ関と違う発想が出てくる所があって、こ
この立案とアイデアが政策のマーケットで比較されて、政策のエンドユーザーである国民、
市民、これは究極の顧客ですが、この前でアイデアを競い合うということが健全な政策策
定に極めて重要なことでないかと思っています。

それからこれに関連して、かなり前から言われていることですが、公的な意思決定や政
策決定において「ガバメントからガバナンスへ」という発想が最近特に注目されています。
ガバメントとは、日本でいえば憲法で規定された、たとえば地方自治の原則から地方自治
法本位に決められていて、4年に一回住民が選挙で選ばれた代表が条例を作り、あるいは
首長がこれを実行するという形式的できちんとした統治の仕組み、これがガバメント、政
府の構造です。ところが最近では4年に一回代表を選んで、代表がわれわれの意を呈して何
かをやってくれるというのでは間に合わなくなってきたわけです。私の講義ではエージェ
ンシー費用という言い方をしていますが、われわれが主役であって、代議士というのはリ
プレゼンタティブですのでリプレゼンテーションしてくれるはずなのですが、これが勝手なことを
やってしまう、コントロールがきかなくなる。これは他人に頼んだが故に、非常にエージェ
ンシーコストが高かついたということになります。住民や国民のニーズも多様化してい
ますし、時間とともに移ろっていきます。そういうことに対して国民の参加意識も高まっ
ている。IT革命のメリットは、そういうものが時々刻々、公共的意思決定が求められる
現場にフィードバックされるということになってきます。そうすると、4年に一回セレモ
ニーを行って、それで民主主義が守られるという時代ではなくなって来ました。そうす
るとエンドユーザーとしての国民の、その時々さまざまな要求にどう答えていくかという

ことが重要になり、その時にはどうも形式的、フォーマルな仕組みでは間に合わない。するとインフォーマルで、責任と権限がある程度分からないままで、パートナーシップで、しかしそれで何となく合意を形成してこれをやっていく伸縮的なガバナンスの構造が求められるようになりました。これは政策においてのみならず、企業意思決定においても、日本に欠けているのはコーポレートガバナンスだと言われていました。この場合は株主の意思が経営に反映されていないことが問題にされたわけですが、さらに進みますと、企業に対するステークホルダーは株主や従業員だけではないわけですし、その工場の近所の住民も影響を受けますし、その製品の最終的なユーザーも影響を受けますし、いろんな人が企業の活動によって影響を受けます。これらステークホルダーの意見を何らかの形でうまく企業活動に織り込んでいく仕組み、これが今日考えられているコーポレートガバナンスの仕組みです。ここでもガバナンスという言葉が使われます。

他にグローバルガバナンスという言葉でも使われます。これは、国際社会は大げさに言えば無政府状態であるわけですから、ここでまさに国際公共政策が問題にしているような公的な課題、あるいは公共財の提供をどうするかということを考えるには、必然的に権力の中枢を欠いたままの公的政策になるわけです。ここにはガバメントはないわけですからガバナンスしかありません。どうやってガバナンスの実効性を高めていくかが積年の課題であるといえます。

もうひとつガバナンスの構造が必要になる世界をご存知でしょうか。インターネットの世界です。インターネットの世界には政府がありません。強制力を持った所がありません。仮に国家権力が何かをしようとしても、インターネットの世界には国境がなく、国境を越えてつながっています。そうするとこの全体をコントロールする仕組みはないのです。サイバースペースのガバナンス、ここでもガバナンスという言葉が使われます。つまり公的な、制度的な、厳格な民主主義を体化したような制度がないところでの公的な問題、政策課題、あるいはパブリックグッズの問題は存在する。それをどう扱うか。これをガバナンスという言葉で表すことが多いと思うのですが、これらを含めてガバメントからガバナンスへという流れが政策過程の問題にもあります。

この中で研究者、大学に籍を置く学者の役割とは何か。もちろん専門的な知見を持って政策決定過程に参加する、それも外野にいてああだこうだと評論しているというのもひとつの役割ですが、やはり大臣になって事を決断して実行していく違いは、責任を負うかどうかです。決断の責任を負うかどうかです。責任を負って政策決定過程に参加していく。

その過程では権力も生まれます。その権力の御し方も含めて学習しながらやっていくというのもひとつの役目かと思います。

私は1930年代の大恐慌のアメリカを勉強したことがあります。そこにはニューディーラーと呼ばれる人々が出てきました。20年代には学問として輝かしい業績を上げた人たちが、目前の同胞の苦勞を見るに見かねて政府に身を投じてニューディーラー（新しい官僚）として働いて、行きつ戻りつの試行錯誤はありましたが、その若さと熱情に身を任せてニューディール政策を大胆に実行した人たちがいます。これは、ある時代の学者の役割としては、おそらくやむにやまれざるヒューマニズムだったと思います。でも、あの10年間に、今日の経済学の学説史の中に何が残ったかという、何も残っていません。学問的には停滞していた時代です。しかし学問よりも実践の方が大切だった時代です。そう考えますと、実践するというのも学者の役割です。しかし、私の願望も含めていいますと、いったんそこでやったことを研究室に持ち帰ってきて、研究室で整理して残していくことも劣らず大切な仕事だと思います。ですから、みなさんもこれからいろいろな政策の策定過程に参加していくことがあると思いますが、新しい世界が開けてくるとエキサイティングで楽しくしている人々に会って、それはそれで結構ですし思う存分やってほしいのですが、時々研究室に帰ってきて、それを静かに発酵させて、自分の業績として残していくということも、後から来る人のためには極めて大切な作業ではないかと思ったりします。

3. 国際公共政策研究科

それから国際公共政策研究科についてですが、創立の経緯については辻研究科長と山内先生が少しおっしゃいましたが、この中で成立の経緯を知っているのは、黒澤教授と私の2人だけです。詳しいいきさつについては説明している時間がありませんが、印象的だったのは金森前総長の御前会議のことです。

さまざまな部局の代表が集まり、ここで「旧教養部、経済学部、法学部でどのようなことが考えられますかね」と金森総長がおっしゃいました。当時私はその会議の委員だったのですが、その会議に出席する前に、当時の蠟山昌一研究科長に「あの話、してくるで」と言いました。蠟山さんは、「おう、しておいで」と言いました。「わかった」ということで、会議で何を言ったかという、「経済学部では新しい研究科の構想があります。それを実現する熱意も決意も人材もそろっています」と啖呵を切ったわけです。そうすると総長は「大変心強いお話でございます。法学部はいかがですか」とおっしゃった。すると、黒

澤先生が同じことをおっしゃった。黒澤先生も、「法学部にもちゃんと準備ができています。」とおっしゃいました。これで国際公共政策研究科はできました。ですから、黒澤先生は建学の始祖です。どうぞ大事にしてあげてください。

はじめに建物をどうするか、どういうカリキュラムで何をやっていくのかを考えたわけですが、最終的には「誰が行くか」という話になりました。経済学部の中から OSIPP に来て欲しい分野の先生に声をかけて回りました。大学というところは業務命令が効かないところですので、上からの命令で「おまえ行け」ということはできません。あくまでボランティアに賛同していただける方を募らなければならない。そこでお願いして回りました。ここで今日の OSIPP を決めるひとつの踏み絵が行われました。それは何かと言うと、「行く決断ができない」あるいは「行けない」とおっしゃった人の理由はひとつでした。どういうことか。これは大学の中ではジョイントベンチャーで、ベンチャービジネスですね。何しろ国際公共政策研究科という研究科は、今でも日本にひとつしかないわけですから。しかも独立専攻で学部がない。すると学部がないからどんな学生が来るか分かったものではない。法律と経済が分かる学生を育てようと言うけれども、法律も経済も分からない学生が来たらどうするの。いろいろなことが心配になるわけです。OSIPP へ行ったときに自分は何コマ教えるのか。学生の論文を指導するときにはどの程度のレベルを考えているのか。予算はどうなるの、会議はどうなるの、考えると分からないことだらけだとおっしゃるわけです。「そういう不確実性の大きなところで、大切な決断はできません」とおっしゃった人が経済学部に残留されたわけです。リスクアバーターというやつです。

その時に、逆に「おもしろいやん。何にも決まっていなかったら自分のやりたいことができるかも知れん。決まってしまうところに行くのだったら合わせなくてはならないけど、決まってないところならばこれから作ったらいいいやな。おもしろいやん。」とおっしゃった方が OSIPP に来たわけです。山内先生もそうです。どちらかと言うと、リスクラバー。先ほどピューリタンと言いましたが、そんなものではなく、宗教上の信念に燃えてそれを実践しようとして来たわけではないのです。単なる腰の軽さというか、何か面白そう、というのを最大の価値と考える人が来たわけです。苦労はありましたが、それなりに面白いことができたのではないかという気がしています。少なくとも、私としては OSIPP に移ってきてからの 6、7 年間というのが、大阪大学にいた 21 年間の中で一番楽しかった。本当にいい時間を過ごさせていただいたという気がします。

博士論文もずいぶんいろいろな分野のものを見させて頂きました。全部が全部私の専門

内ですみずみまで指導できたとは思いませんが、しかし10人の博士論文には十色の人生があります。十色の考え方があります。それをひとつひとつ見せてもらって、私の役どころといえば、「面白いなあ。君のやっていることはこの先どうなるの」と言うことでした。実際そう思いました。いろんな面白いことをやっている学生の研究を見させてもらって、私は指導教官というより、指導された方だと本当に思っております。

これから先、どういうふうになっていけばよいかということですが、全学の「大阪大学理念組織委員会」というのがあります。これからの大阪大学の理念を考えなくてはならない、ということで私もそれなりに考えたのですが、これは採用されずに却下されました。腹が立つので、今日はこれをご披露したと思います。OSIPPのミッションステートメントの中に加えていただければと思います。

営業トーク風にいいますと、三つのDというわけです。まずやはり大学ですから、「より深く」ということが重要です。「Depth」。同じ言葉を言っても、その下にどれだけの氷山が隠れているかによって重みが変わってきます。たとえば、これも私の先輩が言ったことですが、「阪大の経済学部の学生は頭がいい。理論もよく分かる。そこで、“農業市場を自由化するべきである。米の市場を自由化するべきである。そうすると日本の消費者余剰が拡大する。よって貿易の利益が確保される。農産物の輸入解禁という政策は是である。”という答えを実に見事にきれいに論文にする。私もそれは正解だと思う。だけど阪大の学生に決定的に欠けているのは、その話を、後継ぎがいなくて困っている三ちゃん農業のおじいさんのところに行ってやってこい。ぼこぼこに叩かれるかもしれんで。泣かれるかもしれんで。それをやって、一緒におやじさんと泣いて、“そやけどおっちゃん、これしか仕方ないんや”と一緒に泣いて来い。それから書いたものなら認める」とその当時大蔵省にいた先輩は言ったのです。そんなこともせずに、よく私がやるように黒板にチャッチャと線を引っ張って、「消費者余剰が拡大する」というのは違うと言うんですね。つまり結論は同じかも知れないけど、その下の分析が違う。要するに人間に対する愛情が違うということなんです。結論は同じかも知れないが、どれだけ悩んだ末の結論なのか、どれだけのことを考えて、どれだけのことを切り捨てて、どれだけのことを犠牲にした上での結論であるかということを知っているということも重みのひとつだと思います。大学であり、研究であるからにはやはり本質を研究する、これは学問の真髄であると思います。基礎研究や時代を超える洞察力が必要です。それから深く考えるということが必要です。理論的に考える、哲学的に考える、決断した後も反省を加える、こういうことが必要だと思います。

深く考えるということで、特に政策を志す人をお願いしたいことは、「感動」ということだと思います。より深い感動を求めて頂きたいと思います。結局、政策といえども、それによって利害を受ける人が変わります。それでも最終的にはどうするかを決めなくてはなりません。その時にどれだけ多くの人に感動してもらえるかです。理解をするということは頭でできます。感動は体全体でおこります。そして感動すれば行動に移れます。頭で理解しただけでは行動に移れません。人を動かすことができるほどの深さを持って頂きたいと思います。私ができませんでしたのでみなさんやって下さいという意味です。

2つ目のDは、より多様に「Diversity」です。最近では生物学の影響で、「多様性はそれ自体でひとつの価値である」という考え方が広がってきました。遺伝子の世界では多様な遺伝子があることで、それが組み合わせられて新しい組み合わせが出来ていく。環境の激変にも耐えて生き延びる種というものが残って行って生命が維持されるという発想のもとに、多様性というのはそれ自体が価値である。効率性とか公正さを超えたもうひとつの価値として、人類の生存ということを考えると、多様性を何らかの形で取り入れていく必要があるのではないのでしょうか。たとえば異文化理解とか多様な価値のぶつかり合いということもこの国際公共の場で勉強するときに日常的に起こっていると思いますので、やはり大事にしてもらいたいと思います。政策学をやって、「勉強の中で私はこういうことを訴えたい」という人がいます。私の経験でいいますと、審議会の場でヒアリングをすると、ある政策に対して賛成、反対を表明する人が出てきて、本当に思いの丈を述べられます。そのときに、「あなたのお話は分かりました。この政策によってあなたが経済的被害を受けることもよく分かりました。しかしこの政策によって経済的利益を受ける人がいるかもしれないということはお思いになりませんか。ひょっとするとその利益の方があなたの被害より大きいかも知れないということをお考えになったことはありますか。」と聞きますと、大概の人は「そんなことは思ってもみない。私の分野での常識はこうである。だから反対だ。」とおっしゃるわけです。だから、大学で、学問として研究して、こういうことをおやりになったからには、やはりそういうことを理解して欲しいと思います。多様な価値、文化との共存が必要です。

これは多文化社会とか共生の論理などということもありますが、私はもうひとつは「曖昧さへの寛容さ」だと思います。これは工学部の学生にありがちなんですが、黒か白か、イエスかノーか、0か1かの答えが出ないものは科学ではない、学問ではないと思っている節があります。特に高校時代に数学が好きだった学生にはそういうところがあります。

それが経済とか法律とかの分野に来ますと「わけが分からない」と言う。何が正解で何が不正解であるか分からないとなります。私はそれを聞くと思うのですが、やはり「曖昧さへの寛容さ」というものにどこかで慣れ親しんでいく必要がある、身に付けていく必要があると思います。数学の言葉で次元 (Dimension) という言葉がありますが、次元というのはある現象を過不足なく説明するために必要な変数の数です。したがって空間の1点を記述するためにはx軸、y軸、z軸を決めれば一点が決まりますから、これは3次元です。これが時間とともに運動するとなると、時間軸tを加えれば決めることができるので4次元の現象です。このように、ある現象を過不足なく記述するのに最低限必要になる変数の数を次元と言います。この言葉を使って、「自然科学は次元の低い学問だよ、君。」といます。圧力や体積や温度とか、非常によくコントロールされた実験室でわずかな変数を追いかけているわけです。わずかな変数で過不足なく記述できるシステムを対象にしてものを考えているわけです。どういう高等数学を使おうが、それは結局次元の低い学問であるわけです。

ところが社会を相手にする場合、われわれ人間たった一人の行動を記述するためにも、おそらくものすごくたくさんの変数が必要でしょう。ましてそれが集まって社会になって、相互作用が起こると、しかもそれが国際的に拡大するとなると、ようするに歴史が始まるわけですね。歴史こそ一番次元の高い学問なのです。今日は、歴史の先生もいらっしゃいますので最大限の敬意を込めて申し上げますと、歴史こそ人間の学問の最高峰であると思います。なぜならば次元の高い学問であるからです。そう考えると、0か1かで答えのこの世界は次元の低い学問です。低いから劣っているというわけではないんですよ。あくまで私は科学的な真理を申し上げているわけです。変数の数の少ないシステムを相手にしているので次元の低い学問である。われわれは変数の数が非常に多いところを相手にしている。そう考えますと、計量経済学は変数の数を減らしますよね。あれは危険ですね。次元の低い方へ行きつつありますね。歴史はどんどん増やしますね、これは次元が高いのです。私も常々次元の高い学問をやりたいなと思ひまして、真似事として「大恐慌のアメリカ」という本を書いたのですが、いまや絶版であります。

それからもうひとつは、次元をもっと拡張しまして、政策課題というのはますます多様化してきて、高度な技術社会では技術的にも大変複雑になってきています。これを考えていくためには、最近よく考えられている文理融合などが必要です。

例えば、バイオテクノロジーやネットワークテクノロジーなどのどこが恐ろしいか。こ

れがもし目に見える大型のテクノロジーであったら、人間は本能的な恐怖感というのを抱くんですね。「高速増殖炉」などと聞くと、「無から有を生じるというのは、何かうそ臭い。そんなテクノロジーはどこか眉唾で、なにか変なことが起こるんじゃないか」と思うわけです。それから、宇宙ロケットなどは神の摂理に逆らった乗り物です。落ちたら大惨事になると思います。このように、見るからに大型のテクノロジーというのは人間の五感に訴えて恐怖感を催す。したがって、これは制御しなければならない。そこで取り扱いについて、いろいろなマニュアルがあったり訓練をやったり、法律を作ったりいろいろなことをやって対応するわけです。ところがインターネットは微小なテクノロジーの無数の集積です。個人は10万円程度の設備投資しかなくてよいわけです。しかし、それでネットに入ったならば個人で水爆が落とせる世界です。ある国を滅ぼすためには、ネットに入って、まずその国の銀行システムを壊滅させます。一時機能不全に陥らせて、そこへミサイルを撃ち込めばいいという防衛の専門家もいるわけです。要するに影響するところは極めて大きく、地球全体を覆いつくしています。みなさんはインターネットに常時接続して、「ネットでいろいろな情報をやり取りできて便利になった。論文を書くのにこんなに楽になった」と思っている人も知れませんが、もしネットワークに意思があったらどうなるでしょう。みなさんは格好のコンピュータのCPUであり、データベースなんです。考えたことを皆さんのほうから勝手にネットワークへフィードインしてくれているわけです。SF小説めきますが、ネットワークの方に意思があったら笑いが止まりません。勝手に接続して、その人が考えていることを全部入力してくれているわけです。これをコントロールするというのは空恐ろしい世界になるんですが、要するに社会的には恐ろしいテクノロジーなんです。けれども見たところ優しいので、インターネットをどうコントロールしようかという問題に対して人間は本気になれないのです。本気になれないうちに何かが起こるかもしれないという恐ろしさを抱えたテクノロジーなのです。バイオテクノロジーも同じです。やっていることは、ピンセットの先で遺伝子や細胞をいじるなどの微細な技術です。これが発生のメカニズムで何世代も経って他と掛け合わされて、あるいは環境条件が激変して、新しい種がでてきたら何がどうなるかは分からない。もしかすると空恐ろしいことが起こるかもしれない。特に多様性が失われるクローン技術は種の絶滅に通じる可能性があるわけですが、やっている作業はごく簡単なローテクであって非常に安価な実験です。

ここで人間の五感に訴えるものと、影響とがかけ離れてきた。すると、こういうものをどう制御するかを考えなくてはならず、これを考えるにはエンジニアに任せるだけではだ

めで、社会科学の知見が非常に重要になる。あるいは哲学者の知見が重要になります。哲学者に言わせると、IT革命というが何も革命は起こっていない。今でも人間は脳を使って判断をしている。いろいろな情報を脳でもって座標軸に位置づけ、外界を認識している。認識のフレームワークは人間の頭脳の中にある。遠くの音が聞こえるようになり、微細な細胞の中が見えるようになり、地球の裏側から情報が取れるようになったとしても、それは感覚器官が鋭敏になったというだけで、人間、人格に対する影響はまだない。ところがそのうちに、物事を判断する基準を、人間の脳の外側の「外脳」が判断してくれるようになったときが革命です。そのとき初めて、人間とは何ぞやというのが分からなくなる。外脳が判断しているとき、そこにいる生命体というのは何者が分からなくなる。このような話があるわけですが、このような話は哲学者の助けを借りないと分からないわけです。こういうのがこれからだんだん面白くなりますので、せっかくの総合大学、大阪大学ですからいろいろと活用すれば面白いことがいっぱいあります。

だいたい、友達との会話でも学問でも、自分とよく似た知識を持った相手と話すことほど退屈なことはない。特に学生と接してそう思うのですが、30分学生と話して、その学生がぼくの知らないことを一言も言わなかったとき、どんなに疲労感を覚えることか。スキーの話でもなんの話でもいいから、こちらの知らない話をしてくれたら「交換」がおこったわけです。アイデアのエクステンションが起こったわけです。だから、学生の答案を採点することが苦痛なんです。読んでも読んでもぼくの知らないことが書いていない。みんな知っていることばかりだからものすごく辛いんです。しかし、OSIPPの答案は必ず知らないことが書いてありますから面白いんです。知らない世界のことが書いてあるので、面白い。やっぱり、「おもしろさ」というのは関西の学問における最高の価値なんです。

学会で報告しますと、批判されます。「結論が間違っている」「方法が間違っている」「前提が間違っている」「論理に飛躍がある」「妥当性を欠いている」など、こんなものは何とかなるんです。何ともならないのは、「おまえの話、おもしろい」と言われた時です。この「おもしろさ」というのが最高の価値なんです。滑稽さではないのです。「おまえおもしろいなあ」「あいつのやっていることおもしろいで」と言われることが関西での最高の価値なんです。だからみなさんも、たとえばIPP研究会がありますよね、スピーカーを殺そうと思ったら、その人が関西の人だったら簡単です。「先生の話、おもしろいわ」とこう言ったらいいんです。二の句が告げないですよ。その代わりに、学生を育てようと思ったら「君の話、面白いなあ」と言えばいいですね。「おもしろいなあ、その話。よくそんなこと気ついたなあ」と。

「おもしろい」ということは大事なんですよ。

3つ目のDは、「より新しくダイナミズムな発想か」(Dynamism)ということだと思います。新分野を開拓するとか、社会との共同とか、絶えざる自己改革とかいうところで、絶えず変えていくということが必要かと思います。日本社会も薄皮をはがすようなペースの遅さもあるかと思いますが、長い目でみるとずいぶん変わってきました。どんな社会でも一箇所にじっとしているということはありません。ましてや世の中が激変しているときに。たとえば海が凪いでいるときは、船はエンジンを停止していればじっとしていれるそうです。ところが海が荒れ狂っている時に、エンジンを切ると船は転覆するそうです。その時はエンジンをかけて、必死に舵を操ることによって安定するわけです。これからOSIPP もいろいろな環境条件の変化を経験すると思いますが、エンジンを停止していたら転覆します。やはりエンジンをかけて全速力で舵をきって、無駄な動きもいっばいしながら安定するという時代に入ってきているのかなという気がします。

そして最後に未来学ですが、私は京阪奈にある国際高等研究所で「高度情報社会の未来学」というテーマで2年以上にわたって共同研究を進めてきました。この研究がようやく終わりまして、報告の取りまとめに入っているところです。この研究が始まったときには未来学をこんな風に考えていました。今から30年後、50年後にどんな社会になっているかは、おそらく大方の合意が成立するのではないかと。どんな技術にわれわれは依存しているだろうか、どんな社会になっているだろうか、どんな暮らしをしているだろうか、ある程度の合意ができる分野があるのではないかと、そう考えました。そうすると、これは歴史の手法と同じなのですが、そこから逆に今を振り返った時には、未来からみれば現在は過去ですよね。そうすると未来が分かっていると、そこに立って考えれば、今を生きるわれわれは如何に愚かなことをしているのか、「こうなるのが分かっていたらこうすればよかった」という発想がいろいろ見えてくるのではないかと、これを私自身は未来学だと思っていました。未来学を深く勉強したことはないのですが、杉原先生に言わせればこれはおそらく歴史学ですよ。歴史と言うのは過去のことを振り返りますが、絶えず今の問題意識を持って過去を解釈しなおす作業の連続ではないかと、と私のつたない歴史学の知識で思うわけです。しかし、今の立場から過去を振り返るのが歴史であれば、未来の到着点を決めておいてそこから今を振り返るのはやっぱり歴史なのかなという気がいたしました。そして、最終的に到着した結論があります。これが2年間の未来学の研究の最後の結論です。非常に簡単なことです。「未来は水晶玉の中で予測するべきものではない。予測できるものでは

ない。未来は今創るものだ」という結論です。今の結論、今の行動、今の決断、これが未来を形作っていくのであって、未来社会がどうなっているかを予測してもあまり意味がない。歴史の分かれ道というものがあって、ある制度ができた、ある法律ができた、ある政策がとられた、ある戦争がおこった、引き金が引かれたなど、節目節目でなにかが起って、そこで人間は愚かであるか賢明であるかを問わず何かアクションをとるわけです。このつながりが未来を決めていくわけです。これをもって、私の今日の結論にしたいわけですが、「国際公共政策の未来は、今あなたがたが創っているんですよ」というのが私の最後のメッセージです。私自身そう考えてきました。

振り返ってみれば、国際公共政策研究科の第一期生の人たちが博士号論文を書いているときは、そういう熱情が満ち溢れていました。なにしろ国際公共政策学というのはどこにも姿がないわけですから、何を書けば国際公共政策学博士になれるのか、何を研究すればいいのか分からないわけです。一期生、二期生、三期生、その頃の連中が思っていたことは、異口同音に言ったことは、「そうだ、俺たちが書く論文が国際公共政策研究なんだ。俺たちが書く論文がそういう学問分野を作っていくんだ。」このような若さと情熱に満ちた建学の精神というものがあつたと思います。おそらくこれからもいろいろな変化が起こると思います。国際公共政策研究科が母体となって、もっと大きな政策研究の組織が出来上がるかもしれない。もっと異質なものを取り入れて、まさに多様性を日常的に経験・学習していく組織ができるかもしれない。あるいは学内、学外において、もっと大きな役割を引き受けるようになるかも知れない。これはどうなるかは分かりませんし、どうなるか予測するという作業よりも、今どうするかということを考えて、そしてそれが10年、20年経っていったときに、「あのアクションが未来を決めた」「このディシジョンが未来を決めた」「この論文が未来を決めた」「あの発言が未来を決めた」ということになるのではないのでしょうか。

考えてみれば極めて陳腐な結論ですが、しかし私にとっては2年間を費やして到達した結論として、私の中では結構大きな意味を持っている結論なんです。私個人もよく「なぜ阪大を辞めるのですか」と聞かれます。「とことん OSIPP がいやになった。」と冗談も言うのですが、うそです。OSIPP にいた時間が一番幸せでした。これからもおそらく、懐かしく思い出さだろうと信じています。ただ私は21年阪大にいました。OSIPP ができて8年目になりますが、そういう中で駅伝のようにタスキを渡して、次のランナー、また次のランナーが一杯、力を揮うことによって未来ができていくんだらうなという気がします。

格好よく言いますと、「後進に道を譲る」ということになりますが、本当はそんな格好のいいものじゃないんです。放送大学というのは魅力的だと思いませんか。面白そうでしょう。面白さが最高の価値なんです。「おもしろいなあ。」と決めたわけですし、誰に遠慮したわけでも、誰にいびられたわけでもありません。

講義になったか分かりませんが、これをもちまして今日の私の最終講義を終わりにしたいと思います。大変ご静聴ありがとうございました。